

21 世紀の北陸の美術館の在り方

On the future model of museums in Hokuriku area

石村 悠

Ishimura Haruka

文化マネジメントコース

1877 年に日本で最初美術館が設立されて以降、日本の美術館はあらゆる形に変化を遂げてきた。明治維新以降は博物館・美術館文化が誕生し、これまで近い関係にあった美術と日本人の関係は切り離されてしまった。そして生活の中で生きていた美術は、箱の中に入れられ遠い存在となっていく。現在の美術館は収蔵すべきコレクションがあつての設立ではなく、まちづくりのためや市制 100 年記念など美術館をつくることを目的としてしまう事例が多いように思う。

また 2003 年に施行された指定管理者制度は、美術館にも経済性が重視され、研究にかけられる予算が削られるといった研究の軽視が指摘されている。本来、博物館の定義には調査研究がしっかり明記されているにもかかわらず、学芸員の仕事は増え、調査研究がおろそかになっているのが現状といえる。

現代の美術館の在り方は本当にこれでよいのだろうか。今の時代に合った新しい美術館像がつくられるべきではないだろうか。

ではどのような美術館が、今求められる理想的な美術館といえるのか。東京の六本木ヒルズにある森美術館は、入場者が低迷している美術館が多い中で、年間入場者は 130 万人とも言われ、今注目を集める美術館のひとつである。収蔵品を持たず、常設展示もない。ただ集客のためのマーケティングがそのまま運営コンセプトとなっている。そんな新しい美術館のかたちで人気を博している森美術館だが、それではこの森美術館のコンセプトをそのままを真似すれば富山の美術館も成功するのだろうか。私はそうは思わない。

なぜなら東京には東京での美術の楽しみ方があり、来館者も東京の美術館に求めるものと地方、北陸の美術館に求めるものでは違うと考えるからだ。収蔵品がない美術館は、逆にいえば作品を借りなければ展覧会を開くことができない。要するに運営資金がなければ成り立たず、また集客が大きな課題となる。富山という土地で大きな集客を見込む展覧会をするにしても、森美術館のように東京と同じスケールでしたところで同様の集客は見込めないだろう。要するに、地方には地方の、富山には富山の美術館像があるのではないだろうか。

これからの美術館にはネットとの関わりが重要になってくると考えられる。それはエレクトロニクス時代である現代の必然である。インターネット通信網の利用については、美術館相互の研究情報や、収蔵・展示・教育・普及など多くのデータをもつ学芸員ネットワーク、管理・財務用回線も有効に利用されてゆきつつある。こうした美術館間の通信網の充実の主として運営者である専門家用であつたり、美術館に訪問するような仮想的な手段のひとつとして、または図録を見るようにして展示品の鑑賞を随時させてもらったり、情報の検索を容易にすることがふつうのことになりつつある。

やがてはインターネットをフルに活用したインターネット・ミュージアムが出現したり、家庭用の公共回線を通じて、全ての家庭の空間がミュージアム化される時代がくるだろう。しかし、アート鑑賞の最終的な手段としてインターネットは現状の精度では不十分である。所詮モニターというガラス面に映し出された人工の色彩、かたちであり現実性のない映像というハンディを考えれば、やはり美術館における実物を前にしての具体的な鑑賞の機会が必要である。インターネットへの過剰な期待は避けなければならない。

とはいえ、美術がこれからも人々の目に触れるためにはネットは欠かせないツールだ。もちろんそれが地方の美術館であっても同じことである。高速無線 LAN 技術を活用した観光情報支援システムをご存じだろうか。これは実際に、北陸三県で考えられているシステムの一つなのだが、観光施設はもちろん美術館や博物館も対象となっている。美術館や博物館では、子供や障害者向けに作者や作品についての詳細な説明を日本語及び外国語の映像・音声で行うシステムが考えられている。

このシステムは、ワンセグ映像配信技術を活用して構築したもので、受信端末に凡庸のワンセグ携帯電話を利用することができるという特徴を活かし、微弱電波の特性に限られたエリアの中での観光情報の案内を行うことに適したシステムである。しかし実用化にはまだまだ時間がかかるようで、他とは違う美術鑑賞を提案するにはできるかぎり早期の実用化を期待したいところだ。

そしてこれからの美術館にはネットももちろん大切だがそれに加え、私はポータルサイトの要素を取り込むことが必要だと考えている。ポータルサイトとは無料で、誰でも利用できる巨大なネットの入り口のことである。美術館はポータルサイトのように、見る人の分だけ選択肢がある美術館であるべきだと思う。例えば、ルーヴル美術館では、どこから作品を見てもよいし、ショップやカフェに行ってもよいなど数多くの選択肢が広がっている。これからの美術館は、有料である場所を展覧会会場やカフェ、ショップなど美術館全体の 2～3 割程度に抑え、その他は無料で誰でも利用できる空間（エントランス、公園、ショップなど）にすることで、多くの人が自由に行きかうことのできる施設にすることが求められていると思う。要するにこれからの美術館では、誰でも芸術や文化に簡単に触れることのできる空間を提案していきたい。

近年の例でこのような美術館を挙げると、金屋町楽市がある。金屋町楽市とは、江戸時代初期以来の町並みと銅器工芸の職を残す、富山県高岡市金屋町全域を使って行う生活空間内展示のことで、2008 年から開催されている。ここでは町自体が美術館であり作品で、誰でも自由に行きかうことのできるゾーン美術館とも言える。訪れる人にストリートマーケットやイベント等のさまざまな選択肢を与え

てくれる金屋町楽市は、ポータルサイト的な新しい美術館像である。

では北陸、富山の新しい美術館像とはどのようなものだろうか。まず、富山や北陸の芸術文化における特徴について探してみたい。最初に挙げられるのは、石川、富山は伝統工芸が盛んであるということだ。石川は金沢箔、輪島塗、九谷焼、富山は高岡漆器、高岡銅器、井波彫刻といったように地域に由来する美術品が多いことが分かる。そのため優秀な作り手が必要であり、高岡と金沢にはかなり早い時期からアートスクールがあった。またそれと同時に、その工芸品を見せる美術館も東京国立博物館ができてわずか数年後には高岡と金沢には誕生していたというから驚きである。

そして次に挙げられるのは、富山は日展の人氣が依然と強い土地であるということだ。入場者数から見ても、例年日展の入場者数は東京、名古屋に続いて三番目は富山が石川の入場者数が多い。

その理由として、日展の会長にもなった山崎寛太郎が高岡工芸高校の出身であることが挙げられる。日展は今となっては現代美術の波に押され、国民の興味が薄れてしまっているが、昔はかなりの支持を得た展覧会であった。そのため日展を支持していた時代の方が今なお、年をとってからも日展に足を運んでいるため入場者数が多いと考えられる。逆にいえば、だからこそ現代美術には関心が薄く、現代美術をテーマにした展覧会は入場者数が伸びないのかもしれない。

これらの特徴から導き出されるのは、北陸は古くからある伝統文化が依然と強く残る土地であり、美術ファンの層は高齢者が多いということである。しかし、富山では伝統文化を見ることができる県所有の美術館はない。県所有の美術館は二つあり、一つは富山県立近代美術館でもう一つは富山県水墨美術館である。富山県立近代美術館では 20 世紀の初頭から現在に至る美術の流れを世界、日本、富山の 3 つの視点で紹介し、富山県水墨美術館では富山県と水墨画のつながりを中心に紹介している。要するに、富山県としては伝統文化を紹介する場はないということだ。実際には高岡市美術館で、高岡漆器や高岡銅器を見ることはできるのだが、富山県として伝統文化を紹介する場をもたないというのは、とても残念なことである。伝統文化を保管していくことや、よその国や県から富山に来る方たちに富山県の伝統文化を紹介することは美術館として大きな仕事の一つではないだろうか。

もちろん、富山に住む方にも自分たちの住む土地の伝統文化を見てもらい、知ってもらうことは大変重要なことである。現在の富山県立近代美術館、富山県水墨美術館は、よそから借りた作品や購入した作品を受信して紹介するパーティー的な美術館にしか過ぎないと思う。今一度自分たちの土地の伝統文化を見直し、地元の伝統文化や芸術に自信を持ち、発信することができる美術館を目指してはどうだろうか。

また美術ファンの層を広げるためにもまずは、美術館に來たい人を拒まない環境作りが必要だと思う。美術館に行きたい人は健常者だけではない。身体障害者はもちろん、聴覚障害者や視覚障害者も行きたいと思う人がいるはずだ。来館者数の問題は展覧会の内容、広報の仕方もちろんあるが、来館者の層を広げるということも必要だと思う。身体障害者も健常者と同様、美術や文化に触れる権利は平等にあるはずである。実際に行われている事例でいえば、視覚障害者や聴覚障害者が触覚を使って鑑賞をすることができる展覧会や、視覚障害者のために作品を解説しながら一緒に鑑賞するイベントが企画されたりしている。これらは一見、身体障害者のためだけの企画に思われるが、健常者にとっても触覚を使った鑑賞は新しい感覚で作品を味わうことができる。また身体障害者の方に作品を解説しながら鑑賞することで、今まで見ることのなかった視点で作品を見ることができるかもしれない。そんな新たな可能性が隠されているのである。

さらに近年は子どもの美術教育も徐々に発展している。週末には必ずと言っていいほど美術館や博物館で子供向けワークショップが開催されている。美術館は、単に美術作品を見せる場所に留まってはならず、その街の社会教育的な役割を果たす機関として、教育には大きな努力を払わなくてはならない。

まずは子供の美術教育により力を入れることで、幼少期から美術ファンにさせる取り組みをするというのもおもしろいかもしれない。子供が美術館の事業に参加すれば、必ず親や親戚家族が美術館に來てくれる。これは美術館に今一度目を向けてもらう大きなチャンスとなりえるのではないだろうか。子供たちが美術館に行くことが少しでも好きになったり、美術館に行くことに対して抵抗がなくなれば、今後来館者が減ることはないだろう。それだけ未来への投資は必要だと思う。

地方の美術館の 21 世紀の美術館像とは、これまでのように街に賑わいを生むだけでなく、その土地に合わせたコンセプトでその土地でしか実現できない美術館を作り上げることではないだろうか。東京には東京にあった美術館像があるように、富山には富山にあった美術館像があるはずである。私は地方の美術館だからこそ、無理してメガスケールの美術館像を真似するのではなく、常設展示が主となるような見世物小屋では終わらない美術館像であるべきだと思う。

富山には伝統文化である高岡銅器や漆器の他にガラスといった新しい芸術も注目されつつある。これらをうまく利用して、以前富山に工芸という美術が身近にあった頃のように、まずは富山の人にとってもっと美術が身近に感じることをするような美術館像を目指してほしい。